

0. はじめに

本発表では、現代アイルランド語¹について取り扱う。

当該言語は英語の have に当たる動詞を持たず、所有文(‘I have...’)は存在動詞 *bí* ‘be’ (現在形 *tá*)を用いて表し、被所有者が文法的な主語として、所有者が前置詞句として示される。

しかし、辞書の記述である次の(1)と(2)のように、この存在動詞を用いた構文において、所有者を示す前置詞には *ag* ‘at’ (グロスでは AT と表示)と *ar* ‘on’ (グロスでは ON と表示)の2つが使い分けられる。

なお、Dixon (2010)に倣い、所有者を R (possessor_R)、被所有者を D (possessee_D)と表すこととする。

1) (Of property, of sth. in one’s possession)

Tá teach agus talamh _D *aige* _R
be.PRS house.M.NOM and land.M.NOM AT+3SG.M

‘*He* _R *has* *a house and land* _D (lit. *A house and a land* _D *are at him* _R)’

[Ó Dónaill (1977), ‘ag’]

2) (In reference to outerparts of body or thing, regardless of position)

Tá ceann _D *air* _R
be.PRS head.M.NOM ON+3SG.M

‘*It* _R *has* *a head* _D (lit. *A head* _D *is on him* _R)’

[Ó Dónaill (1977), ‘ar’]

(1)では所有者(R)が前置詞句 *ag* ‘at’で、(2)では前置詞句 *ar* ‘on’で示されている²。文法的な主語である被所有者(D)について見ると、(1)では *teach agus talamh* 「家と土地」、(2)では *ceann* 「頭」となっている。

本発表ではこれら2つの区別を譲渡可能／不可能によるものと仮定し、所有構造についての先行研究を見た後、コーパスによる調査を行う。

1. 先行研究

アイルランド語の所有文における前置詞 *ag* ‘at’ / *ar* ‘on’の区別について、譲渡可能性という概念を用いて分析している先行研究は見当たらない。

1.1. Dixon (2010)

1.1.1. 名詞句内部の所有構造

まずは所有に関する通言語学的研究である Dixon (2010)を要約する。

ここでは、名詞句内部の所有構造を次のように分類している。

分類	英語の例
A. Ownership	[John’s car] runs smoothly
B. Whole-part relationship	[Mary’s teeth] hurt
C. Kinship relationship	[My mother] is dead
D. An attribute	[John’s temper] is terrible to behold
E. Orientation or location	[The front of the van] is dented
F. Association	[Paul’s dentist] lives in Perth
G. A nominalisation	[John’s discovery] won him the prize [Dixon (2010: 262-263)を要約]

¹ インド＝ヨーロッパ語族ケルト語派島嶼ケルト語ゴイデリック諸語に属し、Ethnologue によれば話者数はアイルランドに138,000人。

² 前置詞は人称代名詞と融合して一語になる。それぞれの前置詞の変化形は次の通り。

ag ‘at’: *agam* ‘at me’, *agat* ‘at thee’, *aige* ‘at him’, *aici* ‘at her’, *againn* ‘at us’, *agaibh* ‘at you’, *acu* ‘at them’

ar ‘on’: *orm* ‘on me’, *ort* ‘on thee’, *air* ‘on him’, *uirthi* ‘on her’, *orainn* ‘on us’, *oraibh* ‘on you’, *orthu* ‘on them’

Dixon (2010)によると、多くの言語では**被所有者 (D)**名詞は「譲渡可能」と「譲渡不可能」に分けられるが、ヨーロッパ諸語及びアジアやアフリカの主要言語などはこの区別を欠いているという。

さらに、いくつかの言語における、**被所有者 (D)**名詞の「D が R とが密接に関係するもの(≡譲渡不可能)」及び「それ以外(≡譲渡可能)」という2分類について表に纏められている。例えば**アメレ語**(パプアニューギニア)では B. C. D. E. F. が前者に、A. が後者に分類されるという。同様に**スレイヴィー語**(カナダ)では B. C. F. が前者に、A. に加えて B. の一部が後者に分類される。**パナレ語**(ベネズエラ)では B. C. F. が前者に、A. が後者に分類され、**ツィムシアン語**(カナダ/合衆国)では B. C. E. F. が前者に、A. が後者に分類される。

つまり、言語によって所有構造の区別が成される点は様々である。これらの他にも、3つや4つもの**被所有者 (D)**名詞を区別する言語もあるという。

1.1.2. 述語的所有構造

ここでは Dixon (2010)の**述語的所有構造**(本発表では**所有文**と呼称)についての記述を扱う。

それによれば、**英語** have や**仏語** avoir、**独語** haben のような動詞を持たない言語は多く、そうした言語では所有文に**繫辞**‘be’や**存在動詞**‘exist’を用いるという。

アイルランド語の所有文では**存在動詞** *bí* ‘be’ (現在形 *tá*)を用いるため、この記述に沿うものである。

所有文についても**所有者 (R)**と**被所有者 (D)**の関係によって表現方法が異なるという可能性が述べられている。例えば**パンジャープ語**は、所有文を *hoNaa* ‘be’ という**繫辞**で表すが、**所有者 (R)**と**被所有者 (D)**の関係によって、**所有者 (R)**が取る後置詞が異なる。

Dixon (2010)では形式が羅列されているのみで具体例が挙げられていなかったため、その引用元である Bhatia (1993)より次の(3)を引いた(なお、グロスと訳は Bhatia (1993)による)。

3) パンジャープ語

- a. 活動体所有者(R)——譲渡可能所有

ó de kol_R kataabāā_D ne
 he GEN.MS.OBL near / possession book.P are
 ‘He has books’

- b. 活動体所有者(R)——譲渡不可能所有

ó de_R caar muNDē_D ne
 he GEN.MP four boy.MP are
 ‘He has four sons’

[Bhatia (1993: 146)]

ここでの**所有者 (R)**に着目すると、(3a)の譲渡可能には**後置詞** *kol* ‘near’ というものが用いられているのに対し、(3b)の譲渡不可能にはそうした要素は見られない。Dixon (2010)によれば、このように、D と R の関係性が近いものほど、形態統語的に小さな標示が用いられる傾向にあるという。

本発表で扱うアイルランド語の所有文ではどちらの場合にも前置詞が用いられるという意味で両者間に形態統語的なギャップは見られないが、その前置詞の種類によって譲渡可能/譲渡不可能の区別が成されるという点で、このパンジャープ語の例に類するものであると仮定する。

1.2. Stolz et al. (2008)

Stolz et al. (2008)はヨーロッパ諸語における**譲渡可能性**について論じたもので、ケルト語派に属する**アイルランド語**もここに含まれている。

しかし譲渡可能性という概念を用いた研究をおこなっているにも関わらず、ここでは存在動詞 *bí* ‘be’ (現在形 *tá*)と前置詞 *ag* ‘at’を用いたもの(例文(4)、例文(1)に相当)するものと、**繫辞** *is* ‘be’ と前置詞 *le* ‘with’を用いたもの(例文(5))が挙げられているのみで、存在動詞 *bí* ‘be’ (現在形 *tá*)と前置詞 *ar* ‘on’を用いたもの(例文(2)に相当)は挙げられていない。後者は当該言語におけるまた別種の所有表現であるが、本発表で扱いたいものとは少々趣が異なるため、例を挙げるに留まる。

- 4) *bhí* radharc_D *ag* *Harry*_R *ar* *bhróga* *dubha* *snasta* *Uncail Vernon*
 be.PST view.M.NOM AT PN.M.NOM on shoe.PL.NOM black.PL.NOM polished.PL.NOM PN.M.GEN
 ‘Harry_R *had* a view_D of Uncle Vernon’s polished black shoes’ (lit. A view_D *was at* *Harry*_R ...)
- 5) *is* *liomsa*_R an litir_D *sin!*
 be.COP.PRS with+1SG-CNTR DEF.F.NOM letter.F.NOM that
 ‘This letter_D *is mine*_{R!}’ (lit. That letter_D *is with me*_{R!}) [Stolz et al.(2008: 273)]

2. 調査 A

2.1. 調査方法

本発表では、オンラインコーパス *Nua-Chorpas na hÉireann* (The New Corpus for Ireland)を用いる。これは約 3000 万語を収録したコーパスである。

調査に用いるデータは「母語話者が書いた」もの、かつ「元よりアイルランド語で書かれた(=翻訳ではない)」ものとはっきり示されているものに限った。このコーパスでは「標準語」という選択肢が用意されていないため、データには北部(アルスター)、西部(コナハト)、南部(マンスター)という 3 大方言をすべて含む。この条件下での総語数は約 520 万語である。

このコーパスを用いて、1 節で示した被所有者 (D) 名詞のうち、譲渡可能性が問題になると思われる B. Whole-part relationship と C. Kinship relationship を調査した。ここでは、それらのグループに含まれるであろう名詞のうち、頻繁に用いられると考えられるものを選び出した。C.については、Dixon (2010)において、血縁関係(Blood relationship)と婚姻関係(Affinal relationship)とが異なった扱いを受ける可能性が示唆されていたため、その両者を含むように選んだ。以下にその一覧を示す。

表 1：調査に用いる名詞

B. Whole-part relationship

ceann ‘head, thing’, *cos* ‘foot, leg’, *croí* ‘heart’, *gruaig* ‘hair’, *lámh* ‘hand, arm’

C. Kinship relationship

athair ‘father’, *bean* ‘woman, wife’, *deartháir* ‘brother’, *deirfiúr* ‘sister’, *fear* ‘man, husband’,
iníon ‘daughter’, *mac* ‘son’, *máthair* ‘mother’

これらの名詞を検索語として、そこから距離にして 5 語以内に前置詞 *ag* ‘at’または *ar* ‘on’が現れている例をそれぞれ得た。どちらもレンマ検索を用いているため、語形変化を受けた形も全て得ている。その後で存在動詞 *tá* (現在肯定形)または *níl* (現在否定形)が現れているものを抽出し、調査対象とした。

2.2. 調査結果

2.2.1. Kinship relationship

C. Kinship relationship に関しては、非常に明白な結果となった。このグループでは、血縁関係・婚姻関係を問わずに前置詞 *ag* ‘at’が用いられていた。

- 6) *Níl* máthair *nó* athair_D *aici*_R *agus* (...) *and*
 NEG+be.PRS mother.F.NOM or father.M.NOM AT+3SG.F and
 ‘*She*_R *has not* a mother or a father_D *and* (...)’ (lit. A mother or a father_D *are not at* *him*_R *and* (...))
- 7) *Tá* fear breá_D *aici*_R.
 be.PRS man.M.NOM good.M.NOM AT+3SG.F
 ‘*She*_R *has* a good husband_D’ (lit. A good husband_D *is at* *her*_R)

このグループの名詞が被所有者 (D) であった所有文では、所有者 (R) に対して全て前置詞 *ag* ‘at’が用いられていたため、アイルランド語においてこれらの名詞は常に A. Ownership と同様の扱いを受けることが分かった。

2.2.2. Whole-part relationship

B. Whole-part relationship に関しては、所有者 (R) の標示に関して揺れが見られた。まず次の例(8)と(9)では、前置詞 *ar* ‘on’ が用いられていた。

- 8) *Tá* cosa fada_D *ar* na lasairéin_R.
 be.PRS foot.PL.NOM long.PL.NOM ON DEF.PL.NOM flamingo.PL.NOM
 ‘Flamingos_R have long legs_D’ (lit. ‘Long legs_D are on the flamingos_R’)
- 9) *Tá* gruaig fhada go guaille_D *ar* an mbeirt acu_R agus (...)
 be.PRS hair.F.NOM long.F.NOM to shoulder.F.NOM ON DEF.F.NOM two.F.NOM at+3PL and
 ‘The two of them_R have long hair reaching to shoulder_D and (...)’
 (lit. ‘Long hair reaching to shoulder_D is on the two of them_R and (...)’)

B Whole-part relationship に属する全ての名詞が前置詞 *ar* ‘on’ を取っていた訳ではなく、若干の例では前置詞 *ag* ‘at’ の使用が見られた。例えば、次の(10)と(11)ではこのグループの被所有者 (D) に対して前置詞 *ag* ‘at’ が用いられていた。

- 10) *Tá* ceann beag bán_D *againn*_R sa mbaile.
 be.PRS head.M.NOM small.M.NOM white.M.NOM AT+1PL in+DEF.M.NOM house.M.NOM
 ‘We_R have a small white head_D in the house’
- 11) *Níl* an lámh_D *ag aon fhear acu*_R air atá ag
 NEG+be.PRS DEF.M.NOM hand.F.NOM AT one man.M.NOM at+3PL on+3SG.M REL.DIR+be.PRS at
 Séamas Mhaitiú.
 PN.M.NOM
 ‘One of the men_R has not the hand_D on it which Séamas Mhaitiú has’

ただしこれらの例で、それぞれの名詞が本当に身体部位であるかには疑問の余地がある。(10)の *ceann* ‘head’ は ‘thing’ という一般的な意味も持つため、「屋根の上の小さくて白いもの」を表している可能性がある。(11)の *lámh* ‘hand’ についても、具体的な身体部位としての「手」というよりは、比喩的な意味で「技能」という用法と解釈するのがより自然であろう。少なくともこれらの例から、語彙と形式が一对一対応になっているのではなく、ある程度流動的な選択が可能であるということが言えるであろう。

3. 調査 B

3.1. 調査方法

実際の用例の中で、上記の調査 A で用いたような名詞について、その所有を表現することは比較的稀である。そこで、それ以外の名詞についての状況を見るため、調査 B をおこなった。

ここではまず同コーパスを用い、同条件下で存在動詞 *bí* ‘be’ の現在肯定形 *tá* を検索した。さらにフィルター機能を使用し、存在動詞から 2 語以内³にそれぞれの前置詞の 1 人称単数形 *agam* ‘at me’ 及び *orm* ‘on me’ が共起したものを得た。その後、存在動詞の直後に置かれた要素が被所有者 (D) 名詞である例を手作業で選別した。

3.2. 調査結果

調査 B の結果として得られた被所有者 (D) 名詞を 2 つの前置詞についてそれぞれ挙げる。

³ 所有文の構文は「存在動詞 + 被所有者 (D) 名詞句 + 所有者 (R) 前置詞句」である。ここでのフィルター機能は存在動詞から後ろへ 2 語以内——つまり存在動詞を含めて 3 語で構成されたものを出力するよう設定してあるため、調査対象として得た被所有者 (D) は単独の名詞のみであり、2 語以上の名詞句を含まない。

つまり、*teach* ‘house’ という名詞が被所有者 (D) だった場合、*tá teach agam*. ‘I have a house.’ (lit. ‘A house is at me.’) という例は得られるが、これに形容詞修飾を用いた *tá teach mór agam*. ‘I have a big house.’ (lit. ‘A big house is at me.’) という例は本調査の対象外となる。

表 2 : 調査 B にて得られた被所有者 (D) 名詞

<i>agam</i> ‘at me’ (< <i>ag</i> ‘at’)	<i>orm</i> ‘on me’ (< <i>ar</i> ‘on’)
<i>súil</i> ‘expectation’ (335), <i>fios</i> ‘knowledge’ (140), <i>aithne</i> ‘recognition’ (29), <i>trua</i> ‘pity’ (10), <i>rín</i> ‘secret’ (9), <i>scéal</i> ‘story’ (8), <i>barúil</i> ‘opinion’ (8), <i>deireadh</i> ‘end’ (7), <i>cuimhne</i> ‘memory’ (6), <i>taithí</i> ‘experience’ (6), <i>dea-scéal</i> ‘good story’ (5), <i>dúil</i> ‘desire’ (5), <i>tuairim</i> ‘opinion’ (5), <i>coinne</i> ‘expectation’ (4), <i>plean</i> ‘plan’ (4), <i>eolas</i> ‘knowledge’ (4), <i>jab</i> ‘job’ (3), <i>suim</i> ‘sum’ (3), <i>drochscéal</i> ‘bad story’, <i>seanaithne</i> ‘old recognition’ (3), <i>béas</i> ‘habit’ (3) etc. <div style="text-align: right;">[796 examples in total]</div>	<i>brón</i> ‘sorrow’ (73), <i>eagla</i> ‘fear’ (51), <i>faitíos</i> ‘fear’ (40), <i>áthas</i> ‘joy’ (20), <i>ocras</i> ‘hunger’ (10), <i>an-bhrón</i> ⁴ ‘sorrow’ (8), <i>cónaí</i> ‘residence’ (8), <i>deabhadh</i> ‘hurry’ (7), <i>an-áthas</i> ‘joy’ (6), <i>tart</i> ‘thirst’ (6), <i>imní</i> ‘anxiety’ (6), <i>an-aithreachas</i> ‘regret’ (5), <i>cumhaidh</i> ‘sorrow’ (5), <i>cathú</i> ‘regret’ (5), <i>tuirse</i> ‘tiredness’ (5), <i>aithreachas</i> ‘regret’ (5), <i>deifir</i> ‘hurry’ (4), <i>amhras</i> ‘doubt’ (3), <i>aiféala</i> ‘regret’ (3), <i>fonn</i> ‘desire’ (3), etc. <div style="text-align: right;">[348 examples in total]</div>

前置詞 *ag* ‘at’ と共起した被所有者 (D) 名詞で最も多かったのは、*súil* ‘expectation’ であった。これは多くの場合に補文を取り、次の(12)のように用いられる。

- 12) *Tá* súil_D *agam*_R *go* *dtuigeann* *tú* *sin*.
 be.PRS expectation.F.NOM AT+1SG COMP understand.HPRS 2SG.NOM that
 ‘I_R have an expectation_D that thou understandest that’ (lit. ‘An expectation_D is at me_R that...’)

その他には、*fios* ‘knowledge’ をはじめとして、次のような知識を表すものが多く見られた。

- 13) *tá* s_D *agam*_R *an* *seomra*
 be.PRS knowledge.M.NOM AT+1SG DEF.M.NOM chamber.M.NOM
 ‘I_R know the chamber’ (lit. ‘its knowledge_D is at me_R the chamber’)

この *tá* ‘s’ は ‘know’ に当たる表現で、正書法上は *tá a fhios* (lit. ‘its knowledge is’) と 3 語で書かれるべきものであるが、ここでは発音をそのまま写したような書記法が用いられている。今回の調査では存在動詞と前置詞句との間に 1 語のみが現れたものしか対象としなかったため、正書法に従った表記は見られなかったが、実際にはこの用法はもっと多いものと思われる。

用例は少なかったが、これに類するものとして次のようなものがある。

- 14) *Tá* Gaeilge_D *agam*_R!
 be.PRS Gaelic.F.SG AT+1SG
 ‘I_R know Gaelic_D!’ (lit. ‘Gaelic_D is at me_R!’)

これは被所有者 (D) 名詞は *Gaeilge* ‘Gaelic 「アイルランド語」 ’ という抽象名詞であるが、「言語を持っている」というのはつまり「その言語が分かる／出来る」という知識ないしは能力を表している。

対して前置詞 *ar* ‘on’ と共起した被所有者 (D) 名詞には、次のように、*brón* ‘sorrow’ や *eagla* ‘fear’ などの感情を表すもの、または *ocras* ‘hunger’ や *tart* ‘thirst’ などの生理現象を表すものが多く用いられていた。

- 15) *Tá* brón_D *orm*_R *a* *Bhráthair*..
 be.PRS sorrow.M.NOM ON+1SG VOC brother.M.VOC
 ‘I_R am sorry, Brother...’ (lit. ‘Sorrow_D is on me_R, Brother...’)
- 16) *Tá* ocras_D *orm*_R!
 be.PRS hunger.M.NOM ON+1SG
 ‘I_R am hungry!’ (lit. ‘Hunger_D is on me_R!’)

⁴ *an-* は程度の大きさを表す接頭辞で、接続する要素に音変化を要求する。

(12)～(16)の例は 2 節で検討したものと比べるとかなり慣用的な表現であると考えられるが、そこにも「譲渡可能／譲渡不可能」という分析を当て嵌めることが可能であろう。

少なくとも(13)や(14)の知識に関しては、教授などで他者へ「譲渡」することが可能である。対して(15)や(16)の感情や生理現象などに関しては、同情することはあっても「譲渡」することは不可能である。

4. まとめと今後の課題

2 節及び 3 節でおこなった調査の結果について以下に纏める。

表 3：調査 A 及び調査 B のまとめ

所有者 (R) が前置詞 <i>ag</i> ‘at’ で表された被所有者 (D)	所有者 (R) が前置詞 <i>ar</i> ‘on’ で表された被所有者 (D)
親族名称(血縁関係・婚姻関係)、知識	身体部位、感情、生理現象

以上表 3 より、少なくとも、所有者 (R) が前置詞 *ar* ‘at’ で表される被所有者 (D) は他者へ譲渡することが不可能であるものであることが分かった。この結果をもって、本発表ではアイルランド語の所有文における所有者 (R) の前置詞 *ag* ‘at’ と *ar* ‘on’ の区別を「譲渡可能／譲渡不可能(に類するもの)」であると結論付ける。

ただし、親族名称に対する所有者 (R) に血縁関係・婚姻関係を問わずに前置詞 *ag* ‘at’ が用いられることや、多くの例が得られた *súil* ‘expectation’ が「譲渡可能」なのかなど、検討すべき点はまだ残されている。

さらに、次の例(17)のように、表 3 中の *trua* ‘pity’ は感情を表すものに含まれそうであるが、なぜこれにだけその所有者 (R) の標示に前置詞 *ag* ‘at’ が用いられるのか、ということも解決せねばなるまい。

- 17) Ó mo chroí amach, *tá* trua_D *agam*_R duit
 from my heart.M.NOM out be.PRS pity.F.NOM AT+1SG to+2SG
 ‘With all my heart, *I*_R feel pity for thee’ (lit. ‘From my heart out, a *pity*_D *is* *at me*_R to thee’)

略号一覧

-: morpheme boundary / +: fusion / 1: first person / 2: second person / 3: third person / CNTR: contrastive / COMP: complementiser / COP: copula / DEF: definite / DIR: direct / GEN: genitive / M: masculine / NEG: negative / NOM: nominative / PL: plural / PN: proper noun / PRS: present / PST: past / REL: relative / SG: singular / VOC: vocative

参考文献

Bhatia (1993), Tej K. *Punjabi: a cognitive descriptive grammar*. London: Routledge. / Dixon, R.M.W. (2010) *Basic Linguistic Theory Volume 2: Grammatical Topics*. Oxford: Oxford University Press. / Stolz, Thomas, Sonja Kettler, Cornelia Stroh and Aina Urdze (2008) *Split possession: an areal-linguistic study of the alienability correlation and related phenomena in the languages of Europe*. Amsterdam; Philadelphia: J. Benjamins.

オンライン資料

Foclóir Gaeilge-Béarla (<http://www.teanglann.ie/>) (Retrieved 24/10/2015) Online Edition of Ó Dónaill, Niall (1977) *Foclóir Gaeilge-Béarla*. Daly City: Colton Book Imports. / *Nua-Chorpas na hÉireann* (<https://focloir.sketchengine.co.uk/>) (Retrieved 13/10/2016).